ルポ　若い酪農家

畑地酪農のホープ

菊池郡旭志村　大賀慶一さん

阿蘇外輪山の鞍岳西麓にひろがる純農村地帯の旭志村。米を中心に、酪農とみかん栽培が盛んなところである。風景もすばらしい。

ここに紹介するのは、その旭志村高永で乳牛三十二頭、仔牛七頭を飼っている大賀慶一さん(二十二歳)。七人家族の長男である。父親の慶真さんが、まだ若いので、二人で力を合わせてやってはいるが、関係者の間では県酪農界のホープの一人と目されている人である。ガッシリと逞しく、スポーツは何でも好きという彼。旭志村四Hクラブの会長などをしていて、地域青少年のリーダーでもある。

実は、父親が早くから酪農をやっていたこともあって、菊池農高在学中から、この道に進むことに決めていた。いまだかって、大都会に魅力を感じたことはないという。高校の実習では、神奈川県のカス酪農をみた。卒業後、北海道へ行って、大規模な草地酪農を二ヵ月間学んだ。これで、畑作酪農の専業化にも自信をつけることができた。

綿密な計画を大胆に

そこで、総合資金六百九十万円を借りて、昨年一月、畜舎を新しく建てた。畜舎と併設して、山の斜面を生かした放牧場もつくった。いや、小高い山をさがして、そこに畜舎を建てたというのが正しい。斜面は、牛の足腰をきたえるのにいいからだ。頭数も一挙に培増して、成牛三十二頭。ちょうど酪農の先行き不安などもあって、牛は安く買うことができた。

もう一つ、父と二人で大規模にやるには、機械を入れねばならない。大型トラクターをはじめ、モアやハーベスター、ロータリーなど自己資金でそろえた。飼料畑は、三・五ヘクタール。うち一・五ヘクタールは借地だが、これだけあれば、青草は大丈夫である。購入飼料費を安く押えることができる。冬場もサイレージでまかなえる。牛の糞尿は、三・五ヘクタールの畑地へ還元しているから、畜産公害の心配はない。

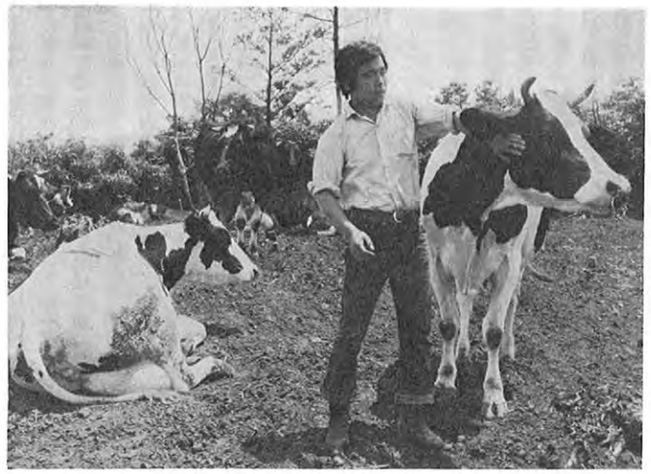
一方、村農協では、酪農指導員一人、獣医三人を置いて生産農家の指導に万全を期している。農業改良普及員の助力もある。こうした一丸となった酪農振興への熱意が実って、一昨年の乳質改善全国コンクールでは、旭志の生乳が二位に入り、品質は折紙つきである。

九州代表で全国大会へ

経営の当面の目標としては、成牛を四十頭にふやすこと。国・県に望むことは、基盤整備と流通・加工面の改善。何しろ、メーカーと小売の中間マージンが高すぎるということが、実感として湧く。その辺の解決が、酪農危機を突破するひとつのポイントではないか、と彼は言う。また、これから、酪農専業農家として生きていくのに、彼自身経営・技術面で多少の不安がないではない。しかし、彼ならそういう困難をきっとのり越えて行けるに違いないと思った。

八月には、大阪で開かれる酪農経営実績発表大会に、年間粗収入一千万円、年間搾乳量十八万キログラムという経営内容をひっさげて、九州代表として出発する。

また、来年一月、東南アジアを訪問する第一回「九州青年の船」の団員に内定したこともつけ加えておこう。



▲ 乳牛の手入れをする大賀さん

ハイライト

オートメ化した育成牧場

★西原共同利用模範牧場を訪ねる

三カ年の歳月と六億　千万円の巨費を投じて、阿蘇郡西原村に建設していた西原公共育成牧場が、ことしの三月完成。

この牧場は、総面積四百三十六ヘクタール(うち草地造成面積三百ヘクタール)収用能力一千頭という全国一の規模を誇り、近代的な機械による牧草の刈取り収納とハーベスターによる省力給餌システムなどを備えている。

主な仕事は、飼養管理技術が比較的難かしい乳用牛と肉用牛の放牧育成。一部哺育も行なう。運営は、県畜産開発公社が当たり、集団的に飼養しながら、県内の畜産農家に、健康で優秀な資質の乳用牛と肉用牛を供給することになる。

▲標高600メートル。広々とした牧場に高原の風が吹きわたる。

▲牧場自慢の大型真空サイロから自動給餌施設へエサが運ばれる。

◀近代装備を誇る牧場センターの眺め。